

タイトル	コメント1
著者	須田, 一弘; SUDA, Kazuhiro
引用	北海学園大学人文論集(69): 36-39
発行日	2020-08-31

コメント 1

須田 一 弘

グラフ先生のご発表では、日本とドイツの研究不正に対する取組のご紹介とその相違点についてのお話がありました。また、小柳先生のご発表は、ご自身をご指摘された日本の研究者の不正についてのお話でした。お二方ともご専門はキリスト教思想に関わるものであり、文献研究が中心となると思います。私は、野外調査が主な研究方法である生態人類学を専攻しております。小柳先生から、文献研究とは違う角度から研究不正についてコメントをするようにお話がありました。私以外の人類学関係のお二人はすでに昨年の人文学会でコメンテーターをお務めになったということで、私にその資格があるかどうかは大いに疑問でしたが、この大役を引き受けざるを得ませんでした。

研究不正について、文化人類学または生態人類学のお話をする前に、関連分野である考古学において、2000年に大きな問題となった「旧石器ねつ造事件」についてお話したいと思います。この事件は大きく報道されたので、ご存知の方も多いと思いますが、まずは、事件のあらましをご紹介します。1949年に群馬県の岩宿で、日本で初めて旧石器時代の石器が発見されました。これらの石器は2万5千～3万5千年前の後期旧石器時代のものとされています。その後、それよりももっと古い時代から日本列島にはヒトが住んでいたのではないかという考えが広まり、全国で前期・中期旧石器時代の遺物や遺跡を探ることがブームとなっていきます。そんな中、1970年代半ばから東北地方のある県のアマチュアの考古学・発掘愛好家であるF氏が、前期・中期の旧石器を次から次へと発掘するようになります。その後、約25年間、F氏は周囲の研究者が期待するような石器を、期待されるような古い年代の土層から次々に掘り出して見せ、そのことに

よってグループにとって欠かせない人物として評価され、後に「神の手」と呼ばれるまでになります。彼が関わった遺跡は、北海道から東北・関東にかけて50カ所を超えています。日本にも前期・中期旧石器時代にヒトが住んでいたことを証明したい研究者、また、これらの発見を町おこしにつなげたい地元関係者にも歓迎され、F氏は民間の考古学研究団体の副理事長になりました。さらに、以上の発見を受けて、日本史の教科書も日本列島に原人がいた可能性を記載するようになりました。

しかし、発掘現場では、発掘成果が出ない日が続いても、F氏到着の翌日か翌々日に「大発見」がある事、ゴールデンウィーク中に「大発見」が集中している事、「大発見」がF氏に集中していた事など、実際に発掘作業に携わっていたアマチュア考古学愛好家から疑問の声が上がっていました。そして、2000年11月5日の毎日新聞朝刊に、F氏が石器を事前に埋めている姿をスクープされ、不正が発覚しました。F氏が発見したとされる旧石器は彼がねつ造し、発掘直前に現場に埋められたものだったのです。

その後は、関連する諸機関が大混乱に陥ります。たとえば、日本史の教科書は記載を削除する申請をします。また、国立等のいくつかの博物館には、ねつ造された石器やそのレプリカが展示されていましたが、展示を取りやめました。また、それまで、大学受験の試験問題にも、これらの遺跡はしばしば取り上げられていました。日本考古学協会は2001年に前・中期旧石器問題調査研究特別委員会を立ち上げ、2004年5月に最終報告を行い、F氏が関わったすべての遺跡がねつ造であったとしました。そして、ねつ造に関してはすべてがF氏の責任であるとされました。

F氏がなぜ石器のねつ造を約25年間にわたって行ってきたのか、彼へのインタビューや関係者への取材を通じていくつかの本も出版されています。ここで、グラーフ先生や小柳先生のご発表に少しでも関連させてコメントさせていただきます。F氏自身はアカデミックな研究者ではなく、自身のキャリアアップや持論を強固なものとするためにねつ造を行ったとは考えにくいのです。むしろ、まわりの研究者の期待に応えるために研究不正を行ったのではないのでしょうか。一方、前期・中期旧石器時代の研究者

は、自分の理論を証明する証拠が欲しかったといえます。F氏の「発見」した石器に疑いを持った研究者もいたようですが、ほとんど無視されたようです。多くの研究者は、自分が見たいものしか見えなくなっていたのかもしれない。この事例は、必ずしも、悪意を持った詐欺師による研究不正とは言えないのではないかと思います。しかし、結果はとても大きなものでした。このねつ造事件以降は、前期・中期旧石器時代の研究はほとんどタブー視されたままになっています。

最後に、文化人類学、生態人類学における研究不正の可能性についてお話しします。文化人類学や生態人類学は、異文化の中に飛び込んで、異なる認識や行為の規則を持った人々にインタビューをしたり、観察や計測をしたりしてデータ（証拠）を集めます。我々の研究のもとになっているのは、言説や行動です。これらは、文献や遺物とは異なり具体的な形を持っているわけではありません。ノートやレコーダー、写真やビデオに記録されたものが主なものです。ノートに記された言説や計測データは、その真偽を確かめることはかなり難しいと言ってもいいでしょう。自然科学で行われる実験研究では再現性の確保が重要ですが、インタビューや行動観察では、別な調査者が同じ情報提供者に同じ質問、観察をしても同じ結果が得られるとは限りません。また、そもそも、論文や民族誌にまとめた時に、情報提供者は個人情報保護の観点から仮名にされることが多く、情報提供者を特定すること自体が難しいと言えます。では、写真やビデオによるデータはどうでしょう。どちらも客観的な記録媒体のように思えます。しかし、写真やビデオはまわりの景観からある場面や動きを切り取ったものです。映っていないところに何があるかは撮影者（調査者）にしかわかりません。自分の見たいものだけを見ている可能性は否定できません。

同じ集落ではないにしろ、同じ民族集団を調査している研究者から、自分の収集したデータ、分析結果と異なる考えが提示された時は、じつは、自分の解釈を見直す良い機会でもあります。私の経験ですが、パプアニューギニアのクボという言語集団の資源利用について論文にしたのですが、すぐに、クボの別の集落を調査していたオーストラリアの研究者が、

それとは正反対の資源利用の特徴についての論文を、私の論文を引用しながら発表しました。同じ民族集団の資源利用がまったく正反対になるのはどうしてなのか？ 私か彼のどちらかがデータをねつ造したのでしょうか？ 私は自分の観察結果と収集したデータが虚偽のものではないことを知っていますし、オーストラリアの研究者も大変優れた生態人類学者で、そんなことをするはずはありません。その後、数年して、彼の調査集落の資源利用が徐々に私の調査地のそれに似てきました。彼は資源利用の変化についても論文で発表しました。それらを考え合わせると、彼のもともとのデータは従来の資源利用の特徴を示しており、私が報告したのは社会変化後のそれであることがわかりました。この解釈はその後、学位論文にも反映させることができました。

文化人類学や生態人類学において学問性を担保し、研究不正を行わないためにどうすればよいのか、現在のところ、個々の研究者に委ねられているのが実情といってもいいでしょう。我々、文化人類学・生態人類学者は自分の見たいものだけを見てしまうということがよくあります。しかし、自分は、自分が見たい・聞きたいことだけを観察し、インタビューしているかもしれないということを自覚することが必要だと思います。